浅井国幹顕彰記念講演

浅井国幹の遺志を現代に活かす

伊藤　嘉紀（浅井国幹顕彰会会長）

千年も長く続きましたこの道統をだれが支え守るでしょうか。十世も続いたわが家の医業も、今やその継続を絶とうとしております。憂心混乱して、申し上げる言葉に窮する次第であります。明治33年庚子、11月５日、十代目の嫡嗣、才拙き浅井正典（まさつね）、真心をこめて恐れ恐れ、血涙を流し再拝して、謹んで申し上げます。（浅井国幹先生告墓文百周年記念文集　告墓文　鎌田正訳　結び）

浅井国幹顕彰会のなりたち。

昭和48年に第24回日本東洋医学会学術総会が名古屋で開かれた折、矢数道明先生が名古屋に浅井国幹先生の顕彰碑を建てる事を舟橋東海支部会会長に強く働きかけられたのがきっかけになり、昭和50年11月15日常楽寺で顕彰碑の除幕などの記念式典が開かれた。その際には全国の漢方関係の先生方に寄付を仰ぎ、お世話になりました。それ以来毎年法要を行ってきました。また平成11年にも墓域修復などでご寄付いただき有難うございました。

浅井家の学問の特徴

第３代の周伯以来黄帝内経を家学とした

素問、霊枢を講じ、方術は後世派的で、史家は、劉、張医方派即ち後世派の別派として扱う。６代（尾張３代）正路以降は折衷派に属すると言われる。

５代正直、号図南は、医戒　十条を唱え、「専施薬石。不行鍼灸者。非我徒也。」と教えた。

６代正路、号南溟は浅井家腹診脈診の祖で、傷寒論の詳細な講義を始めた。

７代正封（正封）通称平之丞、号貞庵　方彙口訣を著す。仁和寺の太素経、新修本草の謄写。

浅井家では、儒家の四書（学庸論孟）に擬して、医経の内経、傷寒･金匱、難経、扁倉伝を四部書とみなしく講学している。

東洋医学と西洋医学の交わり

名古屋大学医学部、病院は明治４年（1871年）、名古屋藩により仮病院、仮医学校が設立されたのが始まりだと言われる。しかしそれには前史と言える歴史があり、伊藤圭介らによる種痘所開設（1852年）、洋医学庠（校）の建議があるという。（名古屋大学医学部の歴史、高橋昭）

久野寧先生は世界で最初に発汗を生理学の研究対象とされたが、きっかけは麻黄の発汗作用に興味をもたれたことだという。発汗の研究、それに続く体温調節の研究は漢方の研究でもある。高木健太郎先生の圧発汗反射の研究は、鍼灸の研究でもある。

鍼麻酔の発見以来、第一線の研究者の興味をひき鍼灸研究の進展がいちぢるしい。先日の国際生理学会では鍼のために丸一日かけたシンポジウムが行われた。

ともすると東洋医学と西洋医学は対立するものとして交わりにくいと思いがちだが、それは間違っているのではないか。私たちが勝手に障壁をつくっているのではないか

つぼにはまれば東洋医学も西洋医学的にはっきりと認識されるのではないか。

漢方で針麻酔に相当するのが五苓散ではないか。私が五苓散はADHによって下がった血漿浸透圧のセットポイントを上げると推定した当時、ADHが腎臓の集合管の水透過性を亢進させるということはわかっていたがAQPは発見されていなかった。今は磯濱先生によって五苓散がAQP3の水透過性を低下させることがあきらかになった。

今後の東洋医学発展にとって最も重要な課題がある。それは陰陽から卒業することである。

略歴

1968年３月　名古屋大学医学部医学科卒業
1973年３月　同大医学研究科（生理学第一）満了
1973年４月　同大第一生理学助手
1979年２月　末盛クリニック院長
1975年　日本東洋医学会理事
1976年　日本東洋医学会東海支部会長
1982年４月　中和針灸専門学校非常勤講師
1991年　浅井国幹顕彰会会長
1997年　愛知医科大学非常勤講師